危機である。吾人が朗々たる青春の日はあへなく逝かんとす。あゝ逝かんとする彼の日の追懷と、貴きものを失へる悲しい自覺とは、或は驅つて吾等をして、かの戰慄すべき大現實の前に雌伏を余儀なくせしめぬであらうか。聞へる、聞へる、波の音だ、荒い平凡の波の音だ。あの怖しい大波に嘗つて奪ひ去られた幾多の英才は、深い社會のどん底で、今は辛い鹽味を味ひ乍ら、紅い血涙を搾つてゐるといふ事だ。此の大危機に際して、賴るべきは唯自己の力自己の腕である。吾々は過去三年間この自信の腕を錬るを忘れてゐた。去るに莅んで、溢れ出づるは强い興奮の氣にあらずして、實に痛々しい悔悟の涙である。いま切實に感するは、何物を以てしても贖い得ざる青春の日を、徒らに空しく過し來つた自己の罪である。

然し乍ら、吾々は斷じて絶望せぬ。青年はたゞ未來に生く。未來である、未來である。これあるがために、吾々には自奮の氣が湧き、厥起の勇が起るのである。よし、異境の現實が、抵抗し難き同化の力を振ふとも、明い未來の標識は必ず吾等に蹈むべき道を暗示するであらう。追憶より得る悲哀と、未來に對する歡樂とは、今日吾人が有する凡てゞある。あの朗々たる夕陽の地平に沒し行く寂寞と、彼方の山に再び仰ぐ朝暾の眩しい光彩とは、吾人が胸底のシムボルである。吾等は去らんとす。龍南の健兒諸君よ、幸に健在なれ。

（二、六、一）

英雄宗教論

山行く人

序言　現代といふ言葉は何となく、垢ぬけのした言葉である、吾々は此の言葉を耳にする毎に、かの寢覺醒

けき春の曙、聲と羽とを輕く操つて、飛んで囀づり囀づつて飛ぶ、群小雀の聲を聞く樣な、さては浮夜の帷落つるを合圖に、黄や紫や赤や青やあらゆる色彩とあらゆる光輝とを身に裝ふて、人を吸ふ歡樂の巷の華やかさを目に見る樣な、浮いた鮮かな輕い氣分に打たれざるを得ない。こんな甘たるい空氣を呼吸し、こんな柔かい生の樂しみを味ひ得る人に――身振も合はぬ「英雄宗教論」とは、我乍ら其の固くて冷かでしかも美味無きに驚きもし落膽したのである。到底咀嚼などとは思ひも寄らぬ事、せめて丸呑みにでもして貰ひたいものゝそれもどうやら疑はしい。書く自らがこの通りでは人は如何にと益々疑はしく、書き出した筆が落ちた事も實に一再に止まらぬ。こんな事とは露知らぬ委員の方は顏を合はせる度毎に、强請の意味を懇請的態度で美化して示される。まして「半頁でもと」先輩の方から命を受けては、唯さへ斷言(コトワリ)の下手な小生は尙更それが出來かねる。且文濟々たる龍南九百の健兒の中、雜誌に投稿する人は、僅かに指を折るだけでも充分に數へられる事を思ふと、幾分憤慨に堪へぬ所から、先づ隗より始めよの先例に慣つて、自己の平常胸に懷いて居た事を、斯くも大膽に愚劣な文字で書き連ねた次第である。だから今小生が取扱はんとする問題が瘦馬に重荷で縱令背負ひ兼ねても、或はそれが爲め罵倒の雨が降り冷笑の石ころが飛んで來る事があつても其れは小生の關する所ではない。小生は唯この眞摯なる心念の叫びを、鈍筆に訴へて忠實に天眞に、書き終ればそれで責も防がれ望も逐げられ滿足も來るである。こゝに現代の品位ある小說の大家、夏目漱石先生の言を挿入して自己の所思に對する裏書としたい。

曰く「自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉りて自家の作物の商標としたくない。唯自分らしい物が書きたい丈けである。手腕が足りないで自分以下のものが出來たり、衒氣があつて自分以上を裝ふ樣なも

のが出來たりして、讀者に濟まない結果を齎すのを恐れるだけである。」と。漱石先生の言葉を心臟と見ると小生の文旨は正しく血液である。結局心臟に支配せられ、心臟に動かされ、心臟を中心として終始するものに過ぎない。一寸贅言乍ら自分の立場を明にする爲にこれだけの筆とこれだけの頁とを費した次第である。

題は號して英雄宗教論といふ意は英雄と宗教は密接なる關係ありと云ふのである。言論が少しく突飛に過ぎて寧ろ荒唐に近い響を傳へる爲に、或は慮外の誤解を招きはすまいかと、少し心殘りがする。から斯に聊か意義を辨じて置きたいと思ふ。元來宗教としいへば型の如く佛教か基督教か乃至は回教道教等の堂々たる大宗教を聯想するのであるが、宗教本來の意義を迹ねて見ると、神的對象及び人類間の究竟的關係を基とするとあつて、何もそれ等に限られた事ではない。唯、人がより以上の物に對して、或はより以上と思考して居るものに對して、精神的交際を爲す事であれば、其の廣く行はるゝと個人に行はるゝとを問はず、之を宗教と命名し得るのである。カーライルも說いた、曰く「玄妙なる宇宙に對する我至重の關係は如何、我が宇宙に於ける義務及び運命は如何と、之に關して實際に、且つ思ひ且つ信ずる所、是れ當に人間最要の事にして、他の一切を創出制定するものたり。是れ卽宗教也」と。故に吾人は彼等英雄にして、以上に擧げた樣な歷々たる宗教を奉ぜぬものも、個人的宗教を有しなかつたと斷定し得る理由がない。個人的宗教の抱擁が一般的宗教の所在せぬ理由であつたならば、尙更そういふ權利がない。隨つて英雄の宗教を有すると否とは、明瞭なる未知數であるだけに、充分興味ある問題とならねばならぬ。

概して吾人は英雄を思ひ豪傑を語るに際し、凡んど直覺的に超人的人格を想像するものである。その想像を

彼れ此れ言ふのではないが、想像は何處迄行つても想像である、強いて之を眞と呼ばうと欲するならば、情的といふ字を冠らせねばならない。況んや知的に事實として論ずる事をやである。いくら英雄だと讃へても、同じく人類の母胞に胚胎し、同じく人類の寰内に生育したもの、そう懸隔のあるべき筈がない。縱令偉大なる威力、驚嘆に値するものがあつても、要するに人間を膨脹した偉大である。若し彼等の性格に瑕瑾があるとすれば、凡人の其れに於けると同一物でなければならぬ。彼等も吾人と等しく、精神を有し肉体を保つて居た以上、人間の解剖學なり心理學なりが、彼等に通用せぬ道理はなく、知情意は無論彼等精神の要素であり、五臓六腑五肢五体は言ふ迄も彼等の肉体を構成して居たのである。

唯一つ毛色の變つた、しかもそれが萬人の崇拜と敬仰とを一身に集め得る威力――人を壓倒する或者を握り、人を溶解する或者を抱き、更に人の企及せぬ所を企及する或者を所持せしに在る。此れ凡人の畏縮し驚嘆し稱讃し、崇敬措かずして加ふるに英雄或は天才の冠を以てした所以である。此の威力――此の魔力――此の能力不思議といはゞ不思議と云ふ事も出來ようが、現代は人面獸心の謎スフインクスも解かれる聖代である。不思議の存在は許されぬ。所謂不思議とは然るべからずして能く然るの謂、まして然るべくして然る事を、不思議と雲烟過眼視するのは、怠惰も既に通り越して愚鈍の部類に入るべきである。英雄を以て先天的とし、其の英才を以て天稟とし神賦とし、しかして人に非ずとする者又其の一たるを免れ難い。敢て吾人は反駁を以て能事とする者でない。しかし人事を盡さずして天命に委ぬる早計を誡めたいばかりに、一つは英雄ともいはるゝ人が、自己の伴らす飾らざる告白を缺いで居るばかりに、吾人は斯を痛論切議して、併せて此の神祕的衣裝に包まれた英雄其のものを、經驗と眞理とで作つたX光線に照して、其の鬱勃たる英氣と威力とを、

畢竟宗教の力に由ると判斷したいのである。宗教の力は言葉を換へて、信念の力と言ふ事が出來よう。宗教は確固たる信念の作成を以て其の義務目的とするからである。信念とは抑も何であるか、意志の根抵である、否動もすれば道を誤る盲目、情の燈である、兼ねて又冷靜氷の如く往々にして死物に等しき知――其の知をして活躍せしむる機關である。朱熹は曰へらく「陽氣の發する所金石も亦透る」と。孟子は論すらく「我よく我が浩然の氣を養ふ」と。陽氣といひ浩然の氣といふも詮ずる所信念の力を指摘するに外ならぬ。宋末の義臣文天祥は之を正氣と辭し、其の身に溢るゝ熱血を吐露して、忠誠の義憤を洩らしたもの卽ち有名な正氣之歌である。

曰く「天地有正氣。雜然賦流形。下則爲河嶽。上則爲日星。於人日浩然。沛乎塞蒼溟。」

曰く「是氣所磅礴。凜冽萬古存。當其貫日月。生死安足論。」

言々句々峻又烈、彼れの胸に燃ゆた信念の火さては勃々の氣慨を見るべきと共に、此の信念一朝事あるに及んでは、激して嵐となつて吹き折らずんばあらず、烈火となつて燒き盡さずんば非ざる威力を餘蘊なく描寫したるものとも視られるのである。信念は斯の如く燃ゆる力であり碎く力であり、同時に活きた力である。恰も磁針の北を指して動かざる如く、確乎不拔、堅忍持久、飽くまで積極的に飽くまで活動的に、苦樂を超越し將死を超越し、しかして生をして最も意義あらしむるものである。時に長短時に廣狹、狂ひ勝ちなる知情意の操縱を巧みに執り行ふて、統一あらしむるものも此の信念を措いて外に無い、「智は圓ならんことを欲し、行は方ならんことを欲し、膽は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す」と望ましい事を取つて附けた樣で、綱渡りでもする樣な、古人修養の理想も、道は遠きに非ず近きに在つて實に此の信念の把持こそ、

これが解決の鍵である。充實した生活はこれを出發点とする。所謂徹底した生活、徹底した勉强、徹底した運動、卽ち趣味と實質に滿ち充ちた生の快業は、斯に初めて發見し得べき事柄であると思ふ。世にいふ精力主義なるものも、人は樣々の解釋を與へて居るであらうが、究竟はこの信念の下に活動するに在らう。意志縱令固くとも信念の重みなければ轉ぶ、胸量廣きこと席の如くとも、信念の剛なくんば卷くべきである。氣合術にいふ虛實の實の如きも信念の存在を異なつた觀察と異なつた名稱とを以て、言ひ表したものであつて、八面玲瓏といひ三昧に入るといふのも要するに信念の變裝に過ぎない。彼の額に毛ありて後頭禿げたる怪物「機會」を捕ふる秘術は他なし、此の信念を有するに在るのではなかうか。言ふまでもなく機會は、或る目的の爲め捉へらるものである以上、信念なきものに終始一貫する目的の在らう筈もなく、目的無き者は永遠に機會の訪問を待つても、徒つて曠日彌久の欠伸を得るに止まらう。吾人は氣骨あるを尙び、主義あるを重んじ、自信あるを喜ぶ。然し乍ら氣骨といふも主義といふも、或は又自信といふも、夫々信念の一端を示す物に外ならぬのであつて、畢竟信念を紹述した物である事を記憶せねばならぬ。

以上反覆重語し來つた信念の內容を、今綜合一括して觀察する時、斯に亦一の特性を見のがす事は出來ない。其れは信念が誠であり眞であり正しい物であつて、或る意味に於て又た多くの場合を通じて、善であり美である事である。身罪無うして配謫となり、天を怨みず人を咎めず「海ならず漂ふ水の底までも、清き心は月ぞ照さん。」と誠意正心の一念に斃れた菅公の如き、或は獨り孤忠を守つて國賊に敵對し、終に其の獲る所となつて、當に院にせられんとするも平然、火に焚かれんとするも泰然、遂に節義の重みに身を殺した顏眞卿の如き、或は君國の危殆に婦女の身を挺して起ち、自ら神使と稱へて軍兵の將となり、戰丸雨飛の間を往來し

て能く國を救ひ、爲に身は敵の焚刑に附する所となつたにも拘らず、徹頭徹尾君國を忘れなかつた佛人ジャンヌダークの如き、一讀慨然襟を正しうせざるものはあるまい。實に彼等の信念は赤き血の華咲く花園であり白く潔き至心湧き出づる源泉であつたのである。彼等の信念の向ふ所、或は神或は天若しくは國若しくは君と、夫々對象は種を別にして居るが、しかし之を概括して云はゞ必ず有限以上感覺以上の或者か、少なくとも絶大の有限若しくは感覺中の最偉なるものと、自ら心に認めたものを固く信憑して居るものと推論される。大を願ふて小を獲るは現世の眞理、其の對象が實在卽ち客觀的なるにもあれ、理想卽ち主觀的なるにもあれ、物的卽ち、自然的なるにもよらず、心的卽ち精神的なるを問はず、兎も角自已より大なるもの自已を支配し得る或者に心を置かない以上、コンマ以上の人たり得るは蓋し難い事である。此れを古來の英雄に實驗するに實に明々昭々たるものがあつて。天理我を欺かずと窃かに感嘆した次第である。基督が「我は神の子なり」と曰つて神と自已とを結び釋迦が「彌陀の化身」と稱して佛と自已とを連ねた如きは、宗敎家たるもの當然な態度として人も怪まず斯に述べる必要もないが、成吉斯汗の如き不世出の英雄にして、此の種の觀念を有して居た事は、斯に特筆大書して記したいと思ふ。話は成吉斯汗實錄に記載する所、事は彼が未だ大汗位に卽かぬ前の前、鉄木眞と名乘つて居た幼少の時である。或時不慮の炎難に遭遇し辛うじて不兒罕（フルカン）なる御嶽に救はれた事があつたが、其の際彼は恩を謝し謹んで言葉正しく「不兒罕の御嶽を朝每に祭れ日每に祈れ」と念じ終つて、帽を手に持ち添へ手を胸に當て、天日に向つて九度跪き、灌奠祈禱を捧げたといふ。人類中の最强者、最强者の最巨人なりし彼が、天に祈り山を祭つたとは、記錄其の物を疑ひたい程に、奇矯人の意表に出でて居る話である、けれども吾人は多くの實例と實理とを參照し、古今の靈敎垂訓に照し、信念の偉大なる

威力に鑑み、之を事實として是認するのみならず、更に進んで偉大なる信念は必ず英雄を作り、英雄は必ず信念を卽ち或る獨特の宗敎を有する人間に外ならぬ事を推論したいと思ふのである。

先づ英雄の通有性ともいふべき、果斷、剛毅、沈著、綿密、敏智等に就て之を分析し解剖するに、總て之と多少の關係を有し、全然信念を根據とせぬものも、之に接觸し關聯せぬものは無い樣である。果斷とは何ぞや、遲疑せざるをいふ、何が故に遲疑しないか、信念あるが故である。剛毅とは何ぞや此れ鞏固雄偉なるの謂、何に由つて能く然るか、信念あるが故である。沈著といひ綿密といひ敏智といひ、皆斯の如くにして信念に結緣せざるはなく、此の意味に於て英雄の諸德は皆連累するものと云ふべく、一德の享受は以て餘德を導者となるものと言へよう。古來時代の革新者となり、或は眞理の發見者となり、歷史に不朽の功名を收めた偉人傑士の事蹟を跡ぬるに、歸する所、此の信念の活用を巧みにした人である。コロブスの如きはそれである。バリツシーの如きも其の一人である。ニユートンの如き、リビングストンの如き科學者探檢家は勿論、其の他宗敎に於て政治に於て、活ける敎典となり活ける銅像となつた人々は皆此の信念の驅使者であつた。英雄といひ豪傑といひ、間接にもあれ兎も角も、信念の受くべき讃辭であつて、唯人を變へ時代を異にし目的を別にして、繰り返し行り返すに外ならぬ。彼は吾人が缺點と弱所とを補綴して、否、截取して金剛力を吾人に附與するのである。時勢は刻々に進步し思想は時を逐うて轉變する。しかれども信念は依然として信念である、內容は流轉しても用途は遂に廢れぬ。激烈なる時の腐蝕力に耐へて未來永劫に生くるものは恐らく信念のみであらう。中には英傑の物に熱中して食を忘るゝものゝ如き、或は睡眠時間の些少なりしを以て、英雄の一大特徵とし一大奇蹟の如く承服して居る人もあるが、要するに此の信念の存在を示す徵候に過ぎぬ

のであつて、一氣緊張して事此に至つたものである。此無信念の中、一階抽んづるものは實に神や天に對するそれである。しかして其の實例は近世の英雄に於て殊に多く見られる。ネルソンが其の最期の戰――最も彼に光榮を與へた海戰トラフアルガルに於て、あの善く人口に膾炙する信號を揭げ終つた後、傍人に囁いた言葉は最も善く此の觀念を發揮して居る。曰く「斯に予が爲すべき事は終りぬ。萬事は世界の主宰者(神)と、大義名分とに信賴す。予は此の光榮ある機會に遭遇し得たるを、深く神に感謝せざるべからず。」と。

同じく英國の近代的英傑式登(ゴルトン)將軍が、遠征萬里、黑風吹(ブラックストーム)き荒るゝ亞弗利加蘇丹(スダン)の地、カーツームに到りし時人民に宣言せし言葉にも、「予は天佑により蘇丹を救はんが爲めに來れり、故に兵士を具せず」と言はれた。英雄の心事符節を合するが如きものあるは吾人の稍實證に力あるを思ふので。

日本に於ても維新の英傑西鄕南洲翁の如き「道は天然自然の道にして、人は之を行ふもの也。故に天を敬するを以て目的とす。」と記されて居る。

神と天――それは神聖である絕對である絕對の偉大である。これを信じこれを賴む時、人は寧ろ自己の無能無力を感ずべき筈であるのに、否實際感受しつゝしかも偉大に近づく。これは少しく說明を要する事である。惟ふに、神を信ずる形式に二樣あると共に、神を信じた結果の吾人にも二種の感情を孕む。形式はいふ迄もなく自依的と他依的とであつて、前者は受動的後者は自動的、前者は觀念の主体を神とするに反し、後者は觀念の主体を自已とする。英雄の如きは後者卽ち自依的であつて積極的である。感情上より之を云へば、我は弱者よ、神、願くは、と、縋るもの、及び、神我を救ひ給ふ、我何を恐れむ、と、勇むもの、後者は卽ち英雄を生む信念の蕾である。神我を救ひ給ふの觀念は果して何に由りて起るか。自依的積極的信念は何に據

りて得べきか。英雄の信念は何を基礎として生ずるか。吾人は此の問題に答ふるに正義を以てしたい、天命の自覺を以てしたい。天を畏れ天を樂むの觀念を以てしたい。正義なれば俯仰天地に愧づる所なく、神天の冥助を疑ふ餘地を有せぬ。羞惡と疑惑とは信念の成らざる所以、吉田松陰も「士道莫大於義、義因勇行、勇因義長。」といつた。實に私念と邪慾とは鞏固なる信念には大禁物である。然し乍ら古來幾多の英雄の中には、隨分無道な行動に出でたるものも少なくない。これより大なる正義を行はんが爲めの己むを得ざる所行であつて、決して正義の觀念の缺乏に由來するものではない。彼の世界統一の大企圖を抱いて起つた英雄が、敵を屠り地を略するの行狀を目するに、自己の野心を遂行せんが爲めの暴虐と思惟するは、未だ其の當を得た論でない、吾人は英雄當初の意を察するに難からざるものである。卽ち彼等は群雄割據し、互ひに小鬪を交へ人民其の累に苦しむを思ひ、自己の能力と天命を重んじて兵を起したものである。其の氣慨天を衝き地を呑み「千里車書盡混同、乾坤豈有別彊封、提兵百万西湖上、立馬吳山第一峰」の如きある蓋し偶然でない。

次に天命の自覺は英雄の最大長所であつて、彼等の成功といひ光榮といひ、皆其の賜に外ならぬ。天命の自覺とは字義の示す如く、自己の生れし所以を知るに在つて、自己の世に生れし所以を知るには、先づ自己の境遇を知り、自己の時代の大勢を察し然して自己の處すべき道を悟了するを要とする。彼等英雄の修養といひ鍛練といひ、之が究極を尋ぬれば、唯此の點に在つたのである、此の天命の自覺こそ一生の骨である。骨はどうしても骨折つて拵へねばならぬ。此れ大學の所謂「知正而后有定定而后能靜靜而后能安安而后能慮慮而后能得。物有本末事有終始。知所先後則近道矣」の眞義ではあるまいか。然し乍ら自覺の動機は偶然である。或時は其の境遇に對す反撥心が、彼を驅りて天命自覺を成さしむるに至ることもあらう。或時は名譽心

や功利心が其の動機をなすこともあらう。又多くの場合、自然的環象や文敎的環象が自覺を導くものである。兎も角も斯る事柄が、不知不識の間に自己暗示を助長して、其の赴く所動かすべからざる英雄の自信を與へて、他日天下に雄飛し咆哮し風靡の力を得る所以となつて居る。此の自覺成りて始めて自助の意義を解せらるべく、斯くて始めてスマイルス云へる如く、「自助の精神は個人に凡ての眞正なる發達の根源」となる也。しかし乍ら此の自覺といふは世の所謂自覺とは親を異にして居る。吾々は慨「自覺」といふ瞳が開いて居るばかりに、徒らに斯くも苦しみ斯くも悶ゑる」と悶訴する彼等の自覺は、空しく情に觸れて輕々しく築かれた自覺、信念の上に腰を据ゑない自覺、消極的自覺であつて、既に情より生れた私生兒である以上、變轉は己むを得ぬ、爲に新らしき自覺は古き自覺を抹殺し、其の都度迷ひ迷ふて、反感から反感へ、矛盾から矛盾へ、精神的に遊牧の民と零落して水草を逐はねばならぬ事となる。吾人の今云ふ自覺は其れと全然背馳するものであつて、敵も味方も人も我も自他共に包容し盡して綽々餘裕あり、唯天帝の命ずる所、社會の要求する所に應じて、自己の處すべき道を自覺するそれである。此れ英雄の由りて生ずる所である。世には英雄は時勢によりて生るとか、時勢は英雄によりて改造せらる等と言ふけれども、吾人は思ふに此れ英雄が時代の趨勢を看破してこれに相應した企畫を立つるものと認めたい。今時代を一の人格と假定すれば、勢は時代の精神である。情に循つて精を制するは勞せずして功を收むる所以、識見卓拔の英傑が之を爲すは當に理の指す所である。

之を歷史に求むるにルーテルの如き其の一たるを免れまい。彼が腐敗した宗敎の改革を稱へたのも實によく當時の時勢に適應した事でカーライルが「其敎は天下を實に返すに在り。世既に假裝と共に住むの久しきに

堪へず、嚴冬の旋風―荒涼―暗黑、困厄、彼れ此の間に人となり、一朝其の慘憺たるスカンヂナビアを脫し、矯たる眞人となり。神となり、基督敎のオーヂンとなり、正當のトールとなり、其の雷槌を奮つてヂョーチン及び怪魔の醜類を擊たんとす」と評したのも實に眞を穿つた言葉である。

彼の那翁を見ても分る。當時の佛蘭西は人道奈落の底に落ちて、正義地を掃つた時ではなかつたか。かのエドマンド、バークが「嗚呼武士道の時代は去れり、歐州の名譽は長へに地を掃へり。」絕叫した其の儘の狀態ではなかつたか。更に飜つて彼れが出生の地コルシカは如何。ゼノア政府の狼の如き手より離れたコルシカは又もやフランスの虎の口に惱まされ、自由は束縛せられ、權利は無視せられ、宛然たる獸待を受けて居たのである。コルシカの輿論は獨立であつた、此れ正しく天の使命である。此れを自覺して能くこれが渦中に起ち大勢を利用して覇業を成したのが彼れナポレオンではないか。

此れと前後して起つた伊太利一統の戰爭も、佛蘭西に墺太利に飜弄せられた彼國としては、已む能はざる問題であつた。此れを自覺して天命の下に起つたのが、カブールである、マッジニーである、ガリバルヂーである。

奴隷廢止に惜しい命を奪はれたリンカーンも其の數に漏れぬ。彼れが決行した奴隷廢止は無論當時の急務であつたが、そは彼れが幼少の時より頭腦裡に印象してゐた事である事は、彼れが荒蕪の地に移民となつて、丸木小屋に起臥し、奴隷の窮狀を見聞して居た事實に照して見ても知り得らるゝのである。

こは二三の例に過ぎないけれども餘はこれを以て察し得べく、要するに英雄は信念を有し、信念は天命の自覺を一要素として居る事の例として引用したに過ぎないのである。

最後に天を畏れ天を樂むの觀念、此れ亦看過すべからざる信念の一成分である。凡そ吾人の苦悶といふものは疑惑より生ずる。何等の疑惑も有せず固き心志を保つには、天理の了知と世情の達觀とは避くべからざる抵當である。しかして達觀の第一は眼を變化に注ぐと共に不易の理を會得し、意を複雜に用ふると同時に統一を悟るに在る。佐藤一齋も言志錄の卷頭に掲げて曰く

凡天地間事。古往今來、陰陽晝夜、日月代明、四時錯行、其數皆前定。至人富貴、貧賤、死生、壽殀、利害、榮辱、聚散、離合、莫一定之數。殊未之前知耳。

浮世無常と觀じつゝ尙ほ其の不動の定數を知り、森羅萬象錯雜なりと眺めつゝ尙ほ其の連絡統一あるを覺る、これ卽英雄であつて、彼が大なりと云ひて恐れず、小なりと云ひて棄てざるものも、畢竟此の天理を會得せるを以てである。吾人の步行は摩擦に由つて行けると聞いた。吾人は奮鬪に由つて生くるのである。吾人が此の世に呱々の聲を擧げた時は同時に戰の名乘りを擧げた時である。奮鬪は必然の運命であつて之を忌避するは天理に逆ふものである。天理に逆ふものゝ敗殘滅亡は火を睹るよりも明かなる事實であつて、天理を樂むの第一義は實に此の奮鬪を期するに在ると思ふ。英雄は總て奮鬪を期した。徹頭徹尾勇猛精進の勢は示した。此れ彼等が天理を樂めるに所由するものであつて、斯の時彼等は成功の緒に就いて居るのである。

信念は以上の如き內容と威力とを現して居る。だから此の信念の有無はいかなる徑庭を齎らすかは、問はずして明らかに想像の付く事であらう。誠に信念は運命の昇降機（エレベーター）である。大勳位の高きに登すも田夫の卑きに落すも、思へば彼の手加減にあるのだ。露國大文豪、ドストエフスキーの傑作、「罪ト罰」に描かれたラスコロニコフといふ青年は、斯んな事を考へて居たといふ。曰く。

非凡の人物には一の特權がある。公の權利ではない、我が良心が容す權利である――其の權利は此非凡の人物に、普通人には沮止せらるゝ障害物を超越させる。然し其は此の非凡な人物の人類一般の幸福を圖らんとする思想が斯の如き超超を要する時に限る。若しケプレルやニュートンの如き人物が世界人類の幸福利便に貢獻し得べき發見をなさんとする時、之を妨害するものがあつたら、其時彼は其の權利を以て、否、義務として其の人の生命を絶つであらう。ルクルグス、ソロモン、ナポレオン、マホメット、其他凡そ總て世界の立法者、人道の改造家は社會人類が神聖視する先祖傳來の舊法を破り、新法を創めた點から見れば一種の罪人である。然し此等異常非凡の人物は血を――無辜の血を流す事を避けなかつた。紛々たる俗衆は斯の如き偉人の權利を認め得ざるが爲め、力の及ぶ時は迫害を加へるが、然し後代の人は此等迫害を受けた偉大な人物の爲に或は銅像を建て、或は紀念碑を建てゝ其德を頌するのである。」と。

此の文句中に散見した「偉人の權利」なる言葉も恐らくは此の信念の動かすべからざる實行の力、それが或る大善を目的とするの故を以て權利と名づけたのではなからうか。韓退之は伯夷頌に

「士之特立獨行適於義而已、不顧人之是非、皆豪傑之士信道篤、而自知明也。」と曰ひ又

「若至於擧世非之、力行而不惑者、則千百年、人而耳。若伯夷者窮天地亘萬世而不顧者也。昭乎日月不足爲明、翠乎泰山不足爲高、巍乎天地不足爲客。」と曰つて居る。

信念換言すれば宗敎の力、少なくも個人的宗敎を有する事は英雄の定律であつて、成功を期する男兒の本領でなければならぬ。信念なき人間はアミーバと肩を並べる資格しかない。馬牛にして襟裾するの譏謗を愛けても對抗する事は出來ないだらう。況んや信念を根抵とせざる短見なる人道主義や將又信念敎育を缺いだ淺

薄なる慈善主義の皷吹は黄河の清を待つよりも空しき事柄であつて遂に夸火日影を追ふの嘆なき能はぬものか。

倩吾國の現狀を見るに宗敎は沒落し綱常は頽廢して居る。否將來も亦此の狀態を持續せんとする騎虎の勢に在る。到底應用の利かぬ刑法や平凡な道德論の防遏し得る所でない。上帝を拜するよりも金力に賴るが上計なり、質實の風は浮華の風と吹き變り、嘗て幾多忠誠の志士の心血を注いで培ふた國家は、內部腐蝕に腐蝕して中空になりつゝあるのだ。嗚呼そも此れは何にに由りて救ふべきか、將又民風不振は何に由來するぞ。吾人は確乎として宗敎の有無を以て解決すべき問題たるを斷言して憚らないのである。宗敎は純主觀的であつて局外者の解し得る所でない。若し解し得る人があればそれは局外者ではないであらう。縱令宗敎が空想的皮相を有して、實際的事理に淺薄であるとしても、空想的に人を養成するのが宗敎の目的ではない、宗敎は天地の恒數、一定不易の眞理を敎へるのであつて、其の對象は科學の知を對象となすに反し、情を對象とするものである。從つて形式は變つても內容は今昔同一軌を行く。形式の空想的なるを以て內容をも空想的となすならば吾人は其の人に次の譬喩を呈したいと思ふ。即ち法華經中にある譬喩品の一である。其れは或る大師が衆民を引率して國を距つる萬里なる寶の山を指して行く。日又日、月又月、衆民は寶山の遠きに倦んで歸らうとする。大師卽ち夢幻に大都市を建設して、目的地來れりと敎へ、之に入らしめ憩はしめて、次に曰へらく、「こゝは汝等の目的地に非ず。寶山は今少しなり急げ。」と告げ、斯くする事幾度かにして遂に寶山に至りしといふ條理である。此插話中夢幻に大都市を建設して、衆民を憩はしめたのは、卽ち空想的であるけれども眞意は寶山に導かんが爲である。吾人の活動に準備的と實現的との二者があるとすれば、宗敎

は正しく準備的であつて、科學は實現的である。科學の所謂研究といひ、その結果の發見といひ、其の當初に於ては明らかに疑問であらう。疑問は普通煩悶の種となるに拘らず、彼等は何が故にこの際に限つて煩悶を產まないか。思ふに疑問は之を積極的と消極的との二樣に解することが出來る。消極的に働く時吾人は煩悶に陷る。積極的に出づる時吾人は興味を感ずるのである。何が故に積極的に出づることが出來るか。いふ迄もなく解決し得べしといふ前提を不知不識の間に頭に置いて、しかして問題の解決に取り掛つて居るからである。此の解決しうべしとの前提を置く事は、暗合か必然か、兎も角も、宗教究竟の目的と一致して居る。餘り遙かなる東は西である。宗教と科學とは、前者は經文に非ざる、目的用途に於て科學の用途と一致し、後者は其の研究に於て、宗教其の物と同一物を藉りて居る、若し宗教を以て空想の產物とするならば、科學は好奇心の子供に過ぎずと、一笑に附し去つても差支へないと思ふ。故に吾人は兩者何れをも偏重せぬ。唯科學は餘りに宗教の無能を說くを止め、宗教は又形式に流れず盲信に陷らず、能く其の眞意の在る所を悟らしめて、兩々相助けて文明の發達を期したい事を切望する次第である。

だらだらと牛の尿(イバリ)を髣髴す。

例へ進んでハウプトマンが物語類の畑地の上に一層立派な結果を收獲するにした所で彼が獨乙文學史上彼の以て任ずる所は確かに唯々自然主義的戲曲の泰斗及開拓者たることであらう

（ウイトコフスキイ）